島充の
城郭模型紀行

大日本絵画

島充の

城郭模型紀行

島充

まえがき

島 充という人物は、城郭模型の製作という手段を選んだ、類い稀な〝探求者〟である。多くの人にとって城の模型を目にする機会とは、まさに観光地の城内や庁舎の中の展示スペースといった場所だろう。そこで目にするのは現存する実物を模した無塗装の白模型や博物館展示模型と呼ばれるものが大半だ。概ね立体物としての完成度は高く、観覧者のほとんどが足を止めていく。だが島の生み出す城郭模型は、それら展示模型とは明確に異なる空気を持っている。

多くの城郭模型を作り続けている、城郭模型作家、島 充。現在は模型専門誌『月刊アーマーモデリング』において「城郭模型紀行」を隔月で連載している。その作品に込められているのは〝再現模型〟であるという強い意志だ。では島の求める再現とはいかなるものなのか。総じてプラモデルに代表される立体物に求められる要素には、〝ホンモノに似ている〟ことが挙げられる。実物のあるスケールモデルにおいては、その実物をストレートに模倣することで似せられる、と一般的には考えられている。だがじつはそんなに単純な話ではない。縮尺模型は実物を可能な限り忠実にスケールダウンしたモデルであるのだが、人間の脳というのは面白いもので、目から入った情報を脳で再構築し、その過程でかなり補正が入る。自動車などでは目線の高さや対象との距離から受ける印象と、神の視点に近い縮尺された模型を見る際の印象とでは大きく異なることがままあるのだ。それは城郭などの大きい建築物であっても同様なのだが、ともあれ似ている似ていないは当然として、城郭模型においては正確か否かのほうが重要なポイントとされている。そのモデルがすでに失われていた場合、まずは残されている資料の正確性が問われる。現代のような記録媒体の無い時代の大型建築物の正確性の確認は、でき得る限り多くの資料を突き合わせ検証することしかできないからだ。島の製作する城郭模型はこの検証にも多くの時間を割いている。文献を読み込めばその記述に齟齬はないか、また古写真を入手すれば対象の城郭のみならず、植栽の高さや背景に写り込んでいるものまでその被写体から得られる限りの情報を引き出す。瓦の数を数えるなどは当然のこととして、他の古写真と突き合わせてはディテールの差異を見つけ出す。古写真から得られる情報はそれだけではない。被写体の角度から撮影位置を割り出し、その一帯の標高を加味し算出して正確な地形までをも再現する。やっていることは限りなく研究者のそれであり、およそ一般的な模型作家の作業からは、かなりかけ離れたことをやっているのだといえるだろう。だがそうやって単に図面や資料の正確さだけを突き詰めていった模型が、本当にそれを見るものの心に響くだろうか。

答えは否だ。

島の城郭模型の根底にある〝再現〟というキーワード。これは単にディテールの正確性だけを求めたものではない。島がつねに考えているのは、完成した城郭模型を見る人たちがまるで実際にその場にいるかのような風景の再現である。城郭を見上げたとき、そこに感じるのはどんな気持ちなのか。現代の話だけではない。その城が築城されたはるか過去にまで思いを馳せる。それは城を単体で仕上げる場合も、情景で仕上げる場合でも変わらない。そこに漂うのは、柔らかな春霞を纏った天守であり、照りつける強い日差しに焼かれる城壁であり、乾いた風が落ち葉を舞い上げる石段であり、また城全体を覆い隠すように降りしきる雪化粧であったり、というような空気感。それこそが多くの模型と島の作品とを隔てる理由に他ならない。そしてその再現で重要なポイントとなるのが彩色工程。城なんてみんな同じような色なのでは、と思われるかもしれないが、そうではない。モチーフとして作り上げるのが現代の城なのか、それとも築城当時のものなのか、それだけであっても瓦の色味や漆喰の手触り、格子の木目など、すべてが異なってくる。無論、築城当時の色合いを完璧に再現することは困難だ。だがその当時の手法は現在まで語り継がれ、資料として残っている場合がある。そこから材料などを調べ上げていけば、おのずとその色合いにたどり着くことができるという算段だ。前述のように作品のテーマによって使用する色合いはすべて異なってくるため、例えば瓦や壁の漆喰など、同じ城を製作するにあたってもまったく同じ色を使用することはないという。作品ごとに異なるテーマを持つ。ここまで考え抜いているからこそ、島の作品は見る人の心に〝風景〟として残るのだ。

こんな製作技法や考え方は、おそらく一般のモデラーにとっては敷居が高く、正直めんどくさいと受け取られてしまうかもしれない。モデラー的な視点で本誌を見れば参考になる部分は多いものの、真似するのはかなり困難と感じる部分も多いに違いない。そういう意味では、本書は模型的な作品集とは少々趣が違う。むしろ日本の名城を旅するかの如くページを手繰っていき、あたかもその地に赴いたかのようにその風景を楽しんでもらうための一冊だ。無論、ハウツーページも用意してはいるが、それは各作品ごとに与えられたテーマを、ここまで昇華させるためにいかなる手法を用いたのか、その手法を選択した趣旨はなんなのか、を視覚的に伝えるための方便に過ぎないのだ。

失われた建築物を見てみたい、という思いから城郭模型を作り続けているのだと島はいう。その製作を重ねる中で、建築物は空間的な存在である以上に時間的な存在でもあるのだと気付かされた。永遠を願って作られた堅牢な建物も、ときの流れの中で姿を変え消えていく。熊本地震による熊本城の被災や、首里城の火災。歴史的な建物の転変を我々は目の当たりにした。過去に失われた城が将来、たとえ忠実な形で復元されることがあったとしても、唯一復元できないもの、それはその建物が重ねてきたときの流れである。

刻を経て風情を増していく日本の建築物……現実にはすでに過ぎ去った一時の流れの中に獲得した色合いを、模型であれば再現することができる。島は、色とかたち、空間と時間を、城郭模型という手段で再現し続けている。写真や遺構、絵図や古写真から建物の形状を復元していき、立体を起こしながらさらに修正を加えていく様は謎解きのようであるが、その結果完成した模型は読み解き明かされた資料性の高い復元模型であり、さらに島の解釈、意図を模型的な描写や表現として加えられたのが本誌の作品たちだ。いざ探求者、島の紡ぎ出す時空の紀行へと誘わん。

（文／寒河江雅樹）

汝、自ラ當ニ知ルベシ

真実には自分でたどりつけ

『仏説無量寿経　巻上』

島 充

しま　みつる　1982年福岡県柳川市生まれ。在住。慶應義塾大学文学部美学美術史学専攻卒業。小さな寺に生まれる。幼少より日本の伝統建築空間に魅せられ、模型づくりに明け暮れる。大学卒業後、寺務のかたわら模型製作を再開、2015年より作家としての活動を開始する。展示模型、メディア向け模型、鑑賞模型から創作模型まで幅広く手掛ける。模型製作の域を超えた緻密な考証に加え、臨場感ある写実的な作風を特色としている。著書に『熊本城超絶再現記』(新紀元社)、『月刊アーマーモデリング』(大日本絵画)にて「城郭模型紀行」隔月連載。熊本城天守閣展示事業に協力

主要作品

2017年 日本橋高島屋「復興祈念 熊本城と加藤清正・細川家ゆかりの品々」展にて縮尺1/100熊本城宇土櫓・飯田丸五階櫓模型(現在熊本市蔵)
2018年 Amazon プライム・ビデオ『MAGI 天正遣欧少年使節団』に豊臣大坂城天守模型で美術協力
2019年 縮尺1/150熊本城本丸模型で熊本城本丸全域を復元

目次

002 はじめに

006 備忘録一　城郭模型製作時の工具・材料

008 第一章

008 備忘録二　用語集

009 **福知山城**

018 福知山城古写真から考察する真の姿とは

020 不鮮明な古写真から細部意匠を読み取る

022 福知山城の製作

026 設計構想を明らかにして迫る福知山城天守築造の経緯

028 貴重資料を読み解く一　福知山城下絵図

030 貴重資料を読み解く二　丹波国天田郡福知山城本丸天守ノ図

033 **二条城**

040 二条城の製作

044 二条城寛永度天守考証記

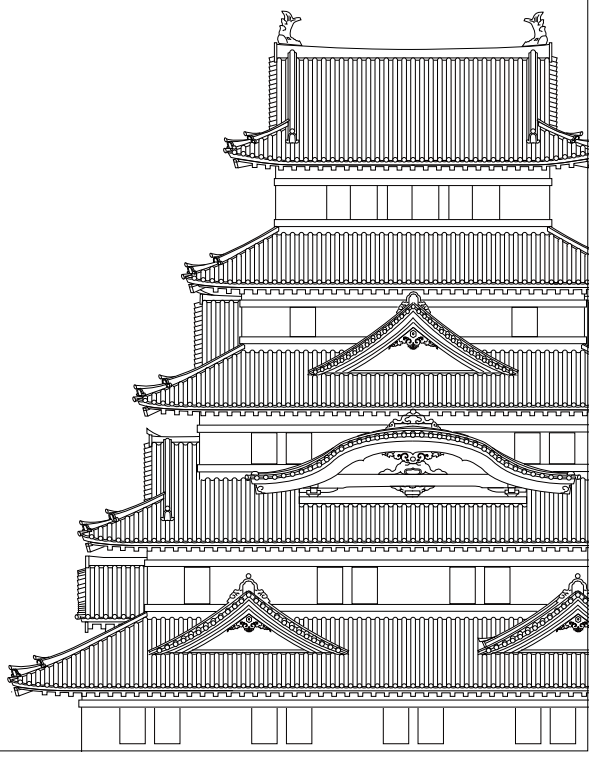
046 貴重資料を読み解く三「京二条御城三十分一之指図」を読み解く

048 **備中松山城**

052 備中松山城の製作

054 **大坂城**

058 大坂城の製作



060 **熊本城**

068 貴重資料を読み解く四「大天守一層西側大破風詳細図」を読み解く

070 備忘録三　島充模型のルーツ

第二章

072 **松江城**

076 松江城の製作

078 **彦根城**

082 彦根城の製作

084 **犬山城**

088 犬山城の製作

090 **名古屋城**

094 名古屋城の製作

096 **姫路城**

100 姫路城の製作

102 **広島城**

106 広島城の製作

108 貴重資料を読み解く五　島充所蔵古絵葉書から

110 発刊によせて／広島大学名誉教授 三浦正幸

【資料提供】

福知山市
本光寺
東京都立図書館
熊本城総合事務所
（掲載順）

城郭模型製作時の工具・材料

著者が城郭模型を製作するうえで、おもに使用している工具や素材など、本書を読み解く上で基本中の基本となるものを解説

◀アイランド式テーブルは、城郭模型という製作物の大きさから自分が製作物の周囲を動いて作業したり資料を広げるのに適している。奥のカウンターに道具を配置し、作業に応じて必要なものを取り出していくスタイル

素材

フルスクラッチビルド作品で主に使用しているのは建築模型用の素材としてもポピュラーなエバーグリーンとプラストラクトのプラスチック素材。とくに半丸断面の棒材はプラストラクト一択で購入時には十数万円分をまとめ買いするという。これらは他社製プラ材と比較して柔軟性が高く、加工がしやすい。仕上がりもシャープで頼れる存在。一般的なプラモデル用接着剤が使用できるのも大きなポイントだ。またフルスクラッチビルド作品に限らないが破風板や軒瓦、窓枠などの外装に全体の精密感の向上を狙ってエッチングパーツを使用する。汎用性のある従来品もあるがサイズ感などを勘案し、多くは信頼のおける外注先である石屋模型店に設計から依頼、自作することも少なくない

塗料

幼少期よりプラモデルを製作していたが、その当時から入手の容易さ、匂い、道具の洗浄が水で行なえるといった手軽さと、経年による退色の無さといった利点からタミヤのアクリル塗料をメインに、ゴールドなど質感が欲しい箇所にはラッカー系塗料を使用している。水性塗料は水彩っぽい絵画的な島の作風にマッチしているという。また、アクリルガッシュは以前から画材屋でその存在は知っていたものの、実際の使用は2015年以降と近年になってから。島が当時目標としていた作家がアクリルガッシュを使用しており自らも使用を開始。全体から細部の塗り分けまで、塗装に使用するのはおもに面相筆。平筆は思ったより筆目が出るので平滑面よりむしろ凹凸のある面に使う

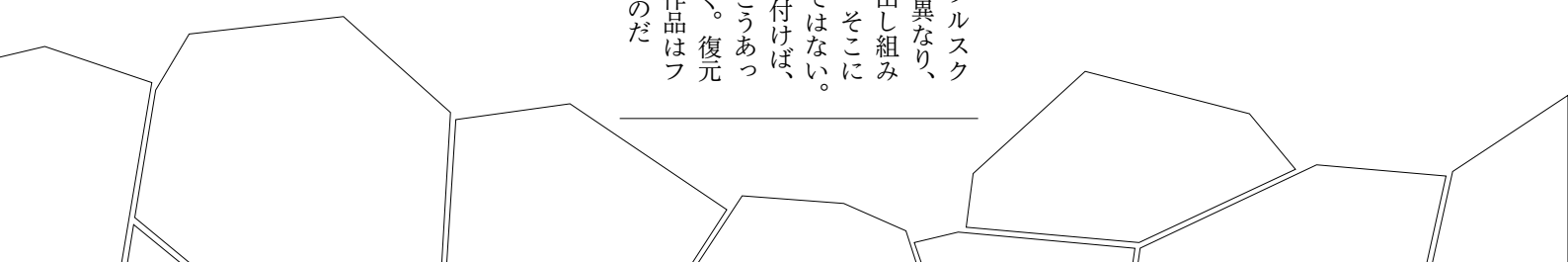
工具

もともと多くの工具を使い分けるという製作スタイルではないため、デザインナイフと金定規がメインツール。ちなみに幼少時の模型製作はおもにハサミだけで器用に組み上げており、手に馴染み使い慣れた道具が一番という感覚はその当時からのものという。なお大型作品の場合、その骨組みとしてケミカルウッドなどのMDF材を使用するが、その際のレーザーカットは外注としている。モデリング素材の大半はプラスチロールなので、接着剤はタミヤのセメント速乾やリモネンセメントといった流し込みタイプを使用。完全に接着されるまでの時間の短さと得られる強度は、大型になりがちな城郭模型ではメリットだ。刺激臭の少ないリモネンセメントは家族のいる環境での恩恵が大きい

第一章

福知山城
二条城
備中松山城
大坂城
熊本城

第一章で掲載する5つの作品はすべてフルスクラッチビルド作品。キットベースの作品と異なり、資料を検証し自ら作図してパーツを切り出し組み立てるこの手法こそ島の真骨頂といえる。そこにあるのは単なる〝立体としての建築模型〟ではない。資料を紐解く中で従来の解釈との違いに気付けば、立体としての検証を重ね説得力を持って「こうあったであろう」という結論へと組み上げていく。復元模型であり、また再現模型でもあるという作品はフルスクラッチビルドだからこそ導き出せるのだ



用語集

城郭模型を知る上で重要なのが各部位の名称。本書で使われている主な部位の名称を表記した

大壁
構造材を塗り隠して平滑に仕上げた壁

隅木
屋根の隅を支える部材

真壁
柱など構造材を露出させた壁

出し桁
壁面前方に出した水平材

腕木
出し桁を支える水平材

破風板
破風へ雨の吹き込みを防ぐ板。装飾的な役割も果たす

懸魚
破風板の拝み部分に取り付けられた飾り

狭間
鉄炮や弓を放つ小窓

方杖
垂直材と水平材の間に斜めに入れた補強材

備後福山城伏見櫓

唐破風
中央が曲線で盛り上がった破風。唐の名があるが日本独自に発達

火灯窓
花頭窓とも。上部を⌒形にした装飾的な窓

裏甲
軒先の板。茅負の上、屋根の葺材の下にある

垂木
屋根を支える等間隔の部材

破風
屋根の三角形を成す部分の総称。城郭建築では装飾として多用される

高欄
縁や橋などの装飾的な手摺

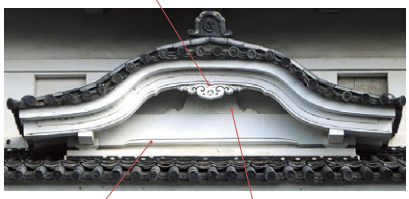
突き上げ戸
窓の覆い戸を棒で突き上げて開閉する窓

下見板
壁面を風雨から保護するために下方を板張りにしたもの

彦根城天守

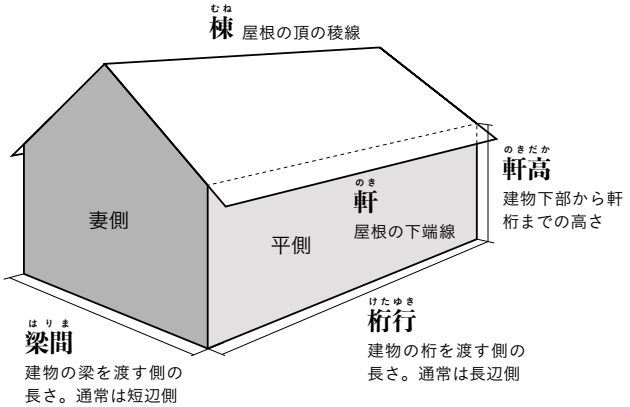
兎毛通
唐破風に使われる懸魚

二条城西南隅櫓



虹梁
梁の一種で虹形に反ったもの

蟇股
上下の横材の間に置いた装飾的構造物



「天守」と「天守閣」

正式には「天守」であり、「天守閣」は俗称であるとされる。しかし例えば江戸城の図面のなかには「天守閣」と書いたものが存在するし、城郭研究のなかでも長らく「天守閣」の用語が使われてきたのも事実である。「天守」という表記もまた、江戸時代を通じて「天守」「殿主」「天主」が混在し、その起源や意味内容を巡ってはさまざまな論考がある。戦後、日本各地で戦火からの復興、あるいは高度経済成長を背景として、失われた城を新たなシンボルとして再興する大きな流れが市民の中から生まれ、天守建築の再建や復興、新造が全国的に行なわれた。現代の新技術で新築された街のシンボルに対して、きらびやかな印象のある「閣」の字を付した「天守閣」という呼称が広く定着したのは自然な流れである。本書では、城が城であった江戸時代に建てられたオリジナルの天守建築を「天守」、昭和以降、現代建築として再建された天守建築を「天守閣」として使い分けた。■

福知山城天守古写真模型
1/150 フルスクラッチビルド

本作品の全景。古写真の被写体は廃城となり解体を待つのみとなった福知山城天守の姿。天守の周囲の御殿や櫓はすでに解体されていたことがうかがえる。本作では天守の最後の姿、石垣は雑草が生い茂り御殿の礎石がむき出しとなった状況を、やや誇張した表現をくわえてドラマチックに再現している

一枚の古写真発見から紡ぎ出された福知山城、真の姿に挑む

２０２０年７月下旬、破却される以前の福知山城の古写真の発見、というニュースをご覧になられただろうか。その発見者こそが本書の著者、島その人だ。オークションサイトの古写真を「復元前の福知山城では？」と見抜き、落札前から検証を開始。これまで判然としなかった情報を可能な限り読み解くことに注力した。そして22万円を超える価格で古写真を落札し、この歴史的価値を持つ一葉を自身の検証結果を添えて専門機関に確認を依頼。そのお墨付きを得たうえでメディアに公開し城郭研究の一助とするとともに、当初の目的である廃城前の福知山城の姿をいち早く立体化すべく製作に着手、鬼神の勢いで完成させたのがこれである。

今回、立体化することで多くのことが判明したとともに、不明瞭な部分が浮き彫りにもなったという。作例では複数の解釈が可能な箇所については中立的な造形を意識。これは、“不明瞭な検証結果を“目に見える立体”として発表するのは、城郭研究の視点からも慎重であるべきと判断したためだ。古写真を再現する検証模型としながら、廃城が決まり一部は取り壊され、破却を待つのみという、建築物の時間の流れにおける重要な一瞬を、まるで絵画を見るかのように感覚的に捉え、情緒的に表現している。

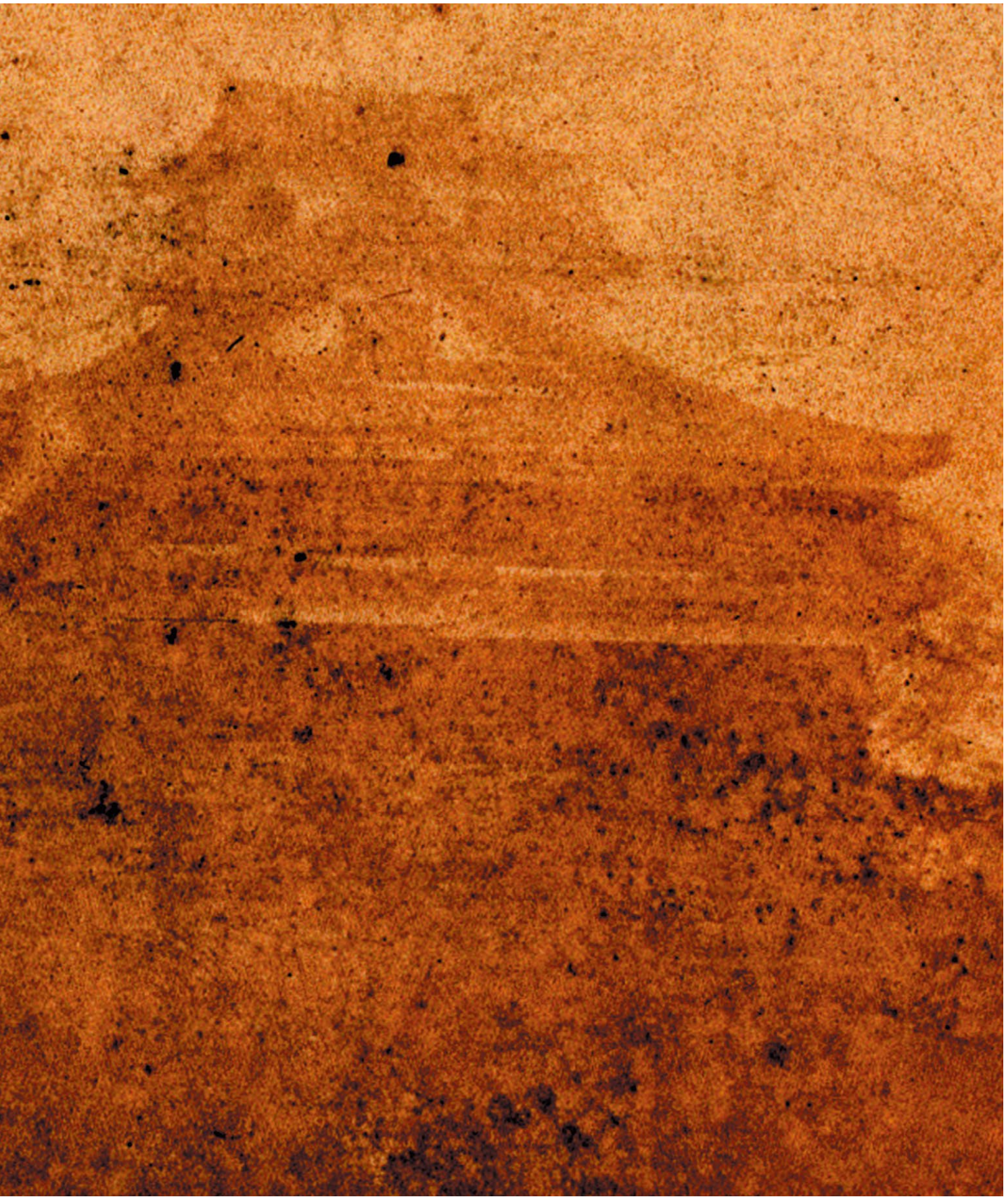
（文／寒河江雅樹）

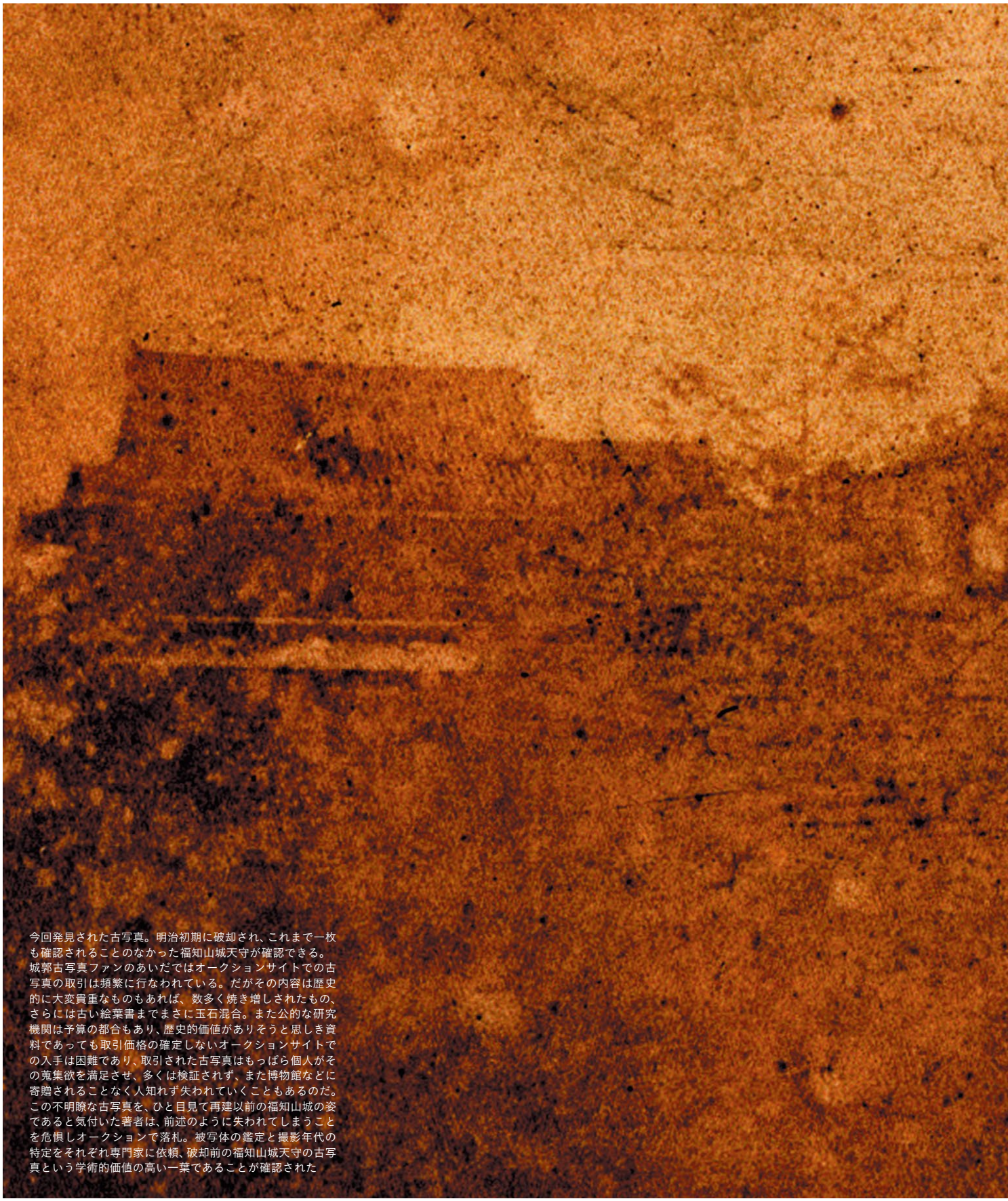
▲天守の汚しは極力控え、部材の質感表現に注力。建築としての風格を出すことを目指して周囲との対比を強調している

▲屋根には0.75㎜幅のラップサイディング板で平瓦、丸瓦には1㎜幅のハーフラウンドプラ棒を丹念に貼り込んで本瓦葺の屋根を表現した。写真のない裏側は古絵図や現在の天守を参考に造形

▲木部の質感は経年を織り込みつつも衰えを感じさせない、建物が持っている力強さや風合いの演出がポイント

▲築造時期の異なる石垣それぞれの質感と色彩に注目。石垣の塗装は使い古した面相筆で色をのせ表情をつけた。長い年月を経た城郭という人工物を覆いつくそうとするかのごとく伸びた雑草が、廃城から解体までという最期の時間を思わせる





今回発見された古写真。明治初期に破却され、これまで一枚も確認されることのなかった福知山城天守が確認できる。城郭古写真ファンのあいだではオークションサイトでの古写真の取引は頻繁に行なわれている。だがその内容は歴史的に大変貴重なものもあれば、数多く焼き増しされたもの、さらには古い絵葉書までまさに玉石混合。また公的な研究機関は予算の都合もあり、歴史的価値がありそうと思しき資料であっても取引価格の確定しないオークションサイトでの入手は困難であり、取引された古写真はもっぱら個人がその蒐集欲を満足させ、多くは検証されず、また博物館などに寄贈されることなく人知れず失われていくこともあるのだ。この不明瞭な古写真を、ひと目見て再建以前の福知山城の姿であると気付いた著者は、前述のように失われてしまうことを危惧しオークションで落札。被写体の鑑定と撮影年代の特定をそれぞれ専門家に依頼、破却前の福知山城天守の古写真という学術的価値の高い一葉であることが確認された

一枚の古写真発見から紡ぎ出された
福知山城、真の姿に挑む

福知山城古写真から考察する真の姿とは

福知山城の天守は明治初期まで存続していた。明治維新の激動のなか、廃城令によって破却され、二の丸も住宅地として完全に削平されてしまう。失われた天守を再建しようという動きが起こったのは１９７０年代である。一度役目を終え、過去のものとなった城を再び形にしようとの思いは市民に募金を呼び掛ける「瓦一枚運動」として広がり、昭和58年（１９８３年）から三年にわたる総事業費八億円のうち五億円はこの募財によって賄われた。新天守閣の完成は昭和61年（１９８６年）。城郭研究の大家であった藤岡通夫博士、最晩年の作品である。しかし、鉄筋コンクリートで再建されたこの天守閣の外観については、疑問の声も聞かれていた。何を隠そう、私自身もその一人である。それは外観の復元の重要な根拠である古写真が一枚も存在しなかったからである。江戸時代の平面古図と、外観を記号的に描いた古絵図、そして遺構としての天守台が復元の根拠であった。その上、復元された外観は、城郭建築の常識から大きく外れた、極めて個性的な姿をしていたのだ。すなわち、長方形平面の短辺側（梁間）に屋根の三角形（妻）が来るのが定石であるのに、長辺側に妻を載せているのである。しかも平面の長短の比率が大きいため、大屋根の奥行が浅くなってしまい、他に類例のない、極めて薄い大入母屋屋根が出現しているのである。私は古図を眺めながら、他の屋根のかけ方が無いものか、真剣に思案してさえいた。

その福知山城の古写真をまさか自分が見つけることになろうとは不思議としか言いようのない巡り合わせである。焼き付けられた像は今にも蒸発してしまいそうにかすかで、不鮮明であるが、建物の形を留めている。そしてそのシルエットが、確かに現在の天守閣と同じ構成の建物なのである。一目見て、福知山城のオリジナルの天守であると分かった。同時に現在の天守閣とは全く異質の建物であるということも。まず、屋根の勾配が緩いことである。これによって空を突くような大屋根とは違って、むしろ屋根の上部から裾野へ流れ落ちるような安定感を感じる。また、最上層の入母屋屋根も、棟が低くなるため、長方形の平面をしていることが一目で分かる。現在の天守閣は、屋根勾配が急であるため、一見すると正方形とも感じられる。そして目を奪われるのが、その緩やかな屋根や軒先につけられた、繊細な反りの曲線である。現在の直線的で威圧感のある屋根とは印象が大きく違っているのは、このなだらかな屋根と反りが醸し出す繊細さによるところが大きい。軽やかで、室町期の建物かと思うほど、古風さが感じられる。外観意匠も部分的に確認できる。次頁にまとめているが、これら細部の意匠も、現在の天守には見られないものが多く全く違う建物であると知らされる。

写真資料がなかったことで、細部が異なるのは当然のこととして、それでも大枠において天守の姿に迫ることができたのは、藤岡博士の考証の賜物に他ならない。江戸時代の資料の信頼性を見抜き、客観的に考察することで、その結果生まれてきた姿が異形の建物であったとしても、確信をもって実施されたことには敬意を抱かずにはおられない。ここで強調しておきたいのは、今回のように資料が新しく出てきたことで、復元の誤りが判明しても、過去に行なわれた復元考証の評価を下げることがあってはならないということだ。あくまでも現在の天守閣は昭和建築としての藤岡通夫作品である。福知山の地に起こった城の再建運動という、昭和の歴史の文脈でこの天守閣を見、当時の考証の背景を推し量りながら、一方では本来の天守の姿を探求しつづける、その営みを上積みし続けていかなければならないのだ。

入手した古写真には、明治に天守が失われて以降、誰も見たことがなかった福知山城の本来の天守がそこに写っているにもかかわらず、写真を見せただけでこれを信じてもらうことがなかなかすんなりといかなかったのは、現在の天守閣が基本的な建築構成におい

てほぼ的確にその姿を復していることが一因であろう。城郭研究をしている友人でさえ、一様に「今の天守閣と似ている」というのである。それはどことなく、現在の天守閣の写真を使った擬古写真ではないかというような疑いを言外に感じさせるものであって、私は狼狽した。どうやら私の目に見えているものと同じようには見えていないらしい。彼らを説得するためにも、立体で造形し、彩色を加えて模型化することで私の目に見えている像を実際的に可視化し、共有することが早いと気づいたため、私は模型化を急いだ。

一枚の写真から模型を作ると一口に言っても、実際の制作は困難を極める。軒の出や高さ、屋根の勾配といった建物を構成している寸法を、具体的な数字として割り出さなければ何も作れないのである。そのためにはまず、平面の形状を把握することから始めなければならない。

実はこの平面の決定に福知山城では困難を伴った。天守台石垣の正確な形状がよく分からないのである。石垣の平面が不整形であり、角度がさまざまに振れているので、測量図や昭和再建時の設計図の石垣平面がどれも微妙に重ならない。現在の天守閣は石垣からはみ出している箇所が多く、石垣と建物が正確に一致していない。今回は、昭和再建時の平面に、松岡利郎氏がかつて実測された石垣の寸法なども参考にして、暫定的に石垣平面を確定した。

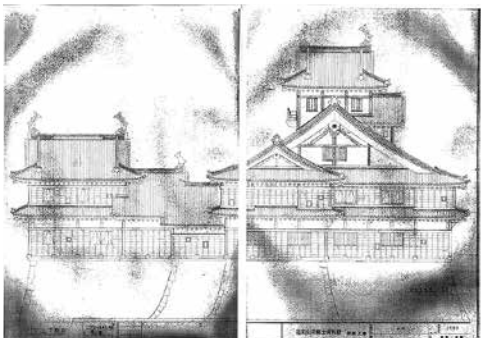
次に、柱位置を確定していくが、この柱の間隔がこれまた不明である。通常、礎石などが検出されていれば柱間が分かるのだが、福知山城の場合、天守破却後、天守台上に朝暉神社がつくられたり銅門番所が移築されたりした経緯から攪乱があり、しかも天守台石垣は中に小石を詰め込んだ総築であり、礎石を検出できなかったそうである。試しに六尺五寸でグリッドを引くと少しあまり、七尺のグリッドだとはみ出してしまう。模型製作時には混成で検討したが、製作後に再検証を行ない、今は六尺五寸統一の柱間ではないかと見ている。ちなみに現在の天守閣は一間が二メートルとなっていてメートル法で設計してあるらしく、前述のように建物が天守台からはみ出しているのはその影響もあるようだ。

より具体的な数値の割り出しにあたって、写真の撮影位置の特定を試みた。天守との距離が分かれば、一点から放射状に投射して、だいたいの寸法を割り出すことができると考えたのだ。写真のなかに写っているものなので、今現在も残っているもの、それは天守台の石垣である。この天守台上にほぼ余白なく天守が建っていたとするならば、立ち上がる壁面の角と石垣の角はおおよそ一致するはずである。写真は画面中央部が樹木らしきもので隠れていて判別できないが、大天守の西南隅、付櫓の西南隅、小天守の東北隅の三点がかろうじて判別できる。この三点が、写真と同じ比率になる地点を探すと、天守から七十五メートルの位置であると推定できた。この地点を平面図上に配置し、中間に古写真を置いて、軒先や破風の立ち上がりの位置など写真に写る主要な点を平面上に投射して、推定値とした。このようにして算出した値をもとに、建物の骨格をまず箱組で起こした。その箱組を、推定撮影地点と同じ位置から撮影し、古写真と重ねて見え方が同じになるか確認しながら工作を進めた。

今回の模型化にあたって、詳細な図面をあらかじめ作成することはしていない。模式的な断面図で概要を掴んでから、平面をそのまま立ち上げて、垂木の役割をする傾斜のガイドを取り付け、屋根面を張っていくという、ほぼ現場合わせのフリーハンドに近い工作であった。二次元の図面上であれこれ考えるよりも、一気に立体にした方が、その建物の立体形状を当然の帰結として再現できる場合があり、立体で検討することで、課題が明確になるのだ。

ここで福知山城の天守を立体化するにあたって要となる屋根の納まりについて書いておきたい。平面はそれぞれの隅が直角にならず、不整形である。この結果、屋根が変形してくる。傾斜した面が斜めに交差することになり、軒先や棟が水平にならなかったり、ねじれたり、軒の出が不均等になったりするのだ。不整形平面にどのように屋根をかけていたのか、その根拠を写真のなかに見出すのは難しい。というのも、軒先に高低差がついている可能性がある箇所が、写真に撮られた西面のちょうど反対側にあたる南東部に集中しているからだ。唯一、写真中央に写っている付櫓の屋根の軒の右端が、縋破風状に折れているかのように見える影が気になった。もし、写真の裏側で軒に高低差がついていれば、どこかで辻褄を合わせねばならず、ここに縋破風があれば、確かにその高低差をスムーズに納めることができる。合理的な処理であるように感じられた。現在の天守閣はまさにこの部分で、軒に一段の段差をつけて解決している。しかし、さらに画面をよく見ると、縋破風に折れているかのような影の奥に、折れずにそのまま伸びている軒線らしきものも見えて悩ましい。今回は、縋破風がある状態で模型化することにした。

完成後に古写真と見比べると、付櫓の軒下の白壁の幅が古写真より広くなっていることがわかる。このことから縋破風はなかったものと一時は考えたが、確証をもって結論を出すには至っていない。古写真を立体にもどすことは、単に画面上の細部の特徴を観察するだけでなく、ある立体構造物をある視点から見たらこのように見えるはずだ、と逆算せねばならず、そこに難しさがある。同時に模索の醍醐味でもある。今なお福知山城天守の全貌は明らかではなく、今後、別の角度から撮られたものや、より鮮明な古写真が発見されることを願うばかりである。■

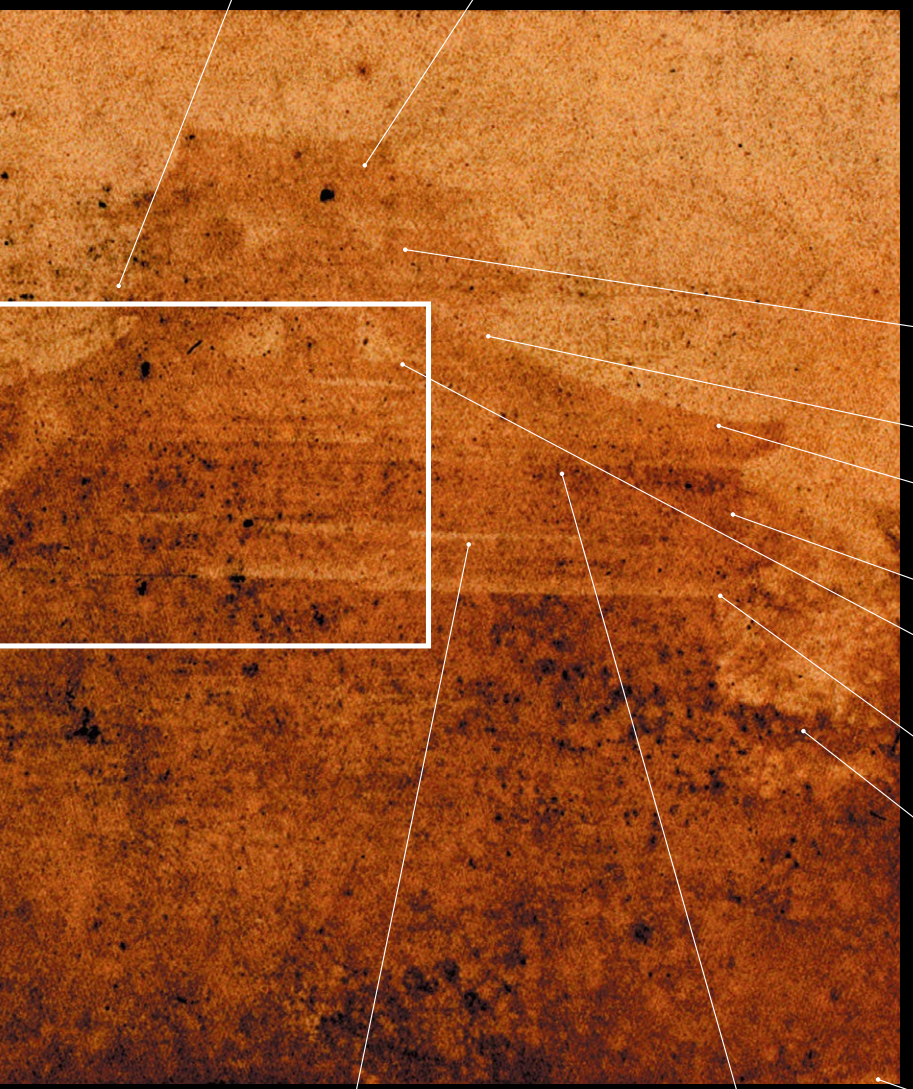


▲福知山市郷土資料館新築工事図面より西立面図
(提供:福知山市)

◀元々の福知山城は明治4年(1871年)に廃城となり、明治6年(1873年)の廃城令によって解体された。その後、1973年に再建の動きがあったもののオイルショックの影響で中断、1982年からあらためて再建計画が始動、1986年に再建し現在に至っている

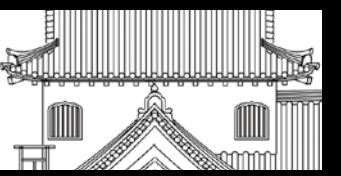
一枚の古写真発見から紡ぎ出された
福知山城、真の姿に挑む

不鮮明な古写真から細部意匠を読み取る



北側の縁側。高欄の意匠はわからないが、縁を支える縁束の影が見える

最上階の屋根。勾配がたいへんゆるく、一目で長方形平面であるとわかる。勾配は5寸程度と思われる。大棟に鯱瓦がなく鳥衾であるようだ。大棟に軽く反りがある



最上階の窓は平面古図のとおり隅に寄っている。両側は垂直に立ち上がっているが上部が水平では無いようにも見え、火灯窓である可能性も捨てきれない

中段。開いた突き上げ戸の先端が見える

隅棟のみで降り棟はない

石落しの突出が確認できる

大入母屋。妻壁中央に窓があり、その下に大虹梁を真壁に見せる。破風板は素木。懸魚の意匠は不明である

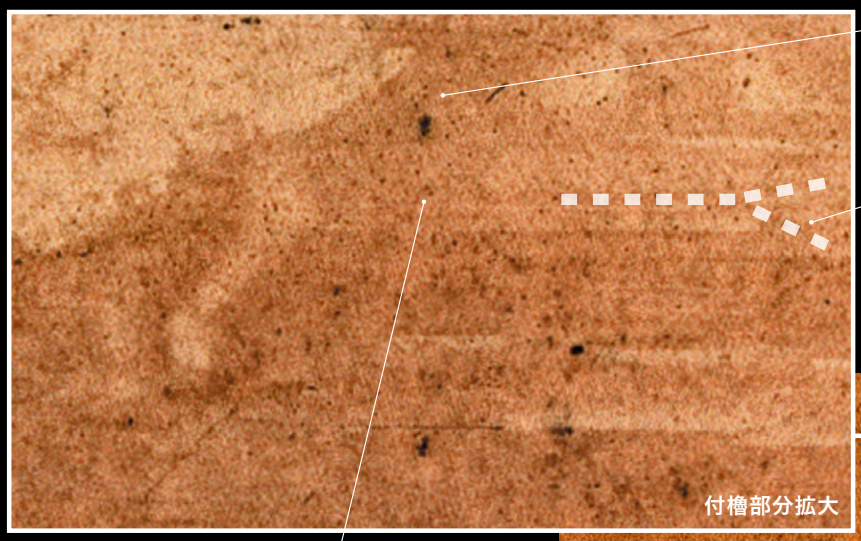
方杖か

菱櫓が見えず、撤去されていることがわかる

傾斜した白壁は土塀か。位置的には二の丸から本丸に至る坂道である

白壁部分に突出した窓のようにも見える四角い形が見える

二階壁面の下部、屋根との境目に面戸漆喰が遠くからも目立つ幅で存在する



妻壁が暗く、板張りか

軒の先端部分が庇状に下がっているようにもそのまま伸びているようにも見える

軒瓦の下の裏甲は素木か。漆喰の垂木の上に黒くはっきりした線が見える

小天守。瓦の筋が確認できる。棟の長さを検討すると、現在の小天守とは違って片方が切妻の片入母屋であることがわかる

軒反りがある

二階の壁面は軒下いっぱいまで板張りであるらしく、垂木の漆喰が目立つ。初重の庇と二階壁面の境目に大天守と同じく面戸漆喰が見える

小天守一階の白壁。上部が乱れているのは庇が傷んでいるためか

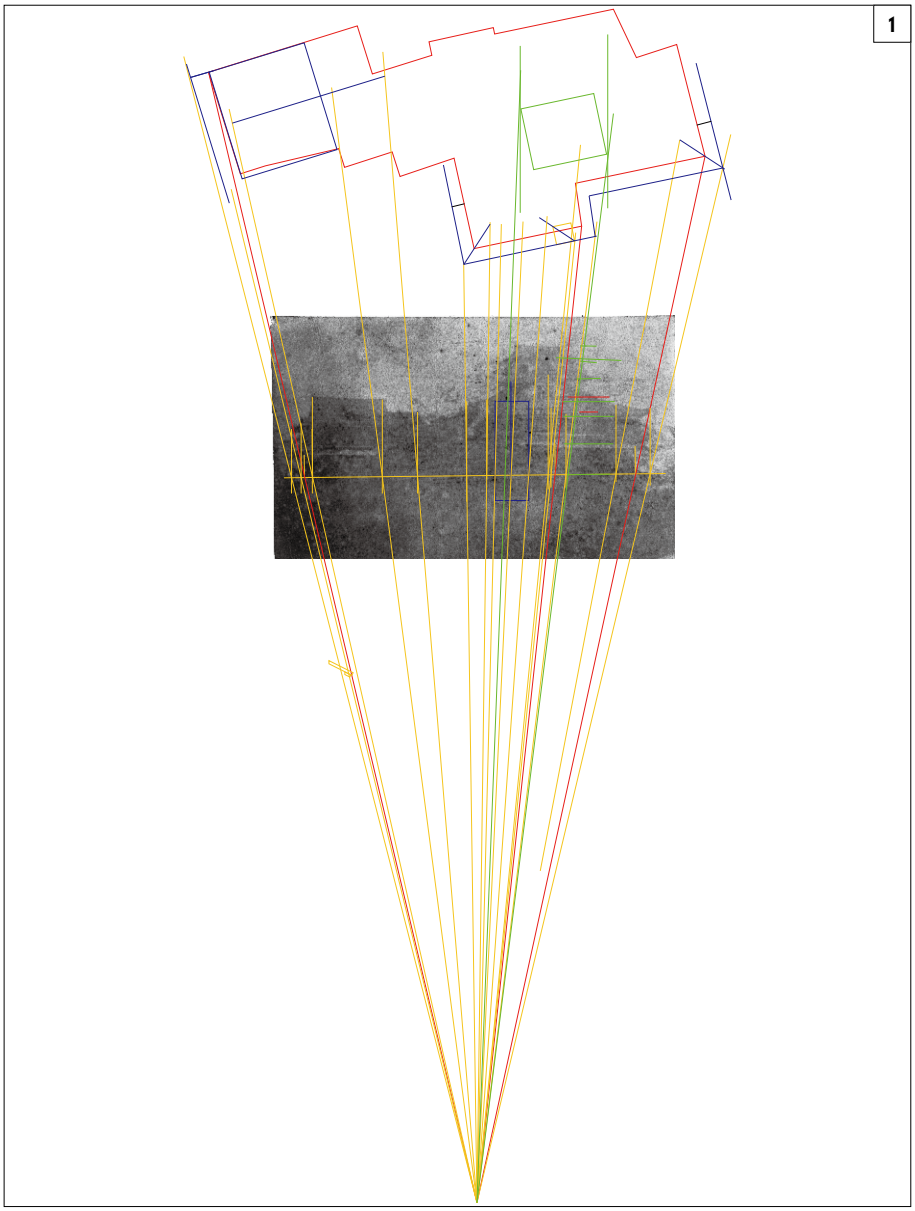
続櫓部分は樹木があるのか判然としない

古写真原寸大

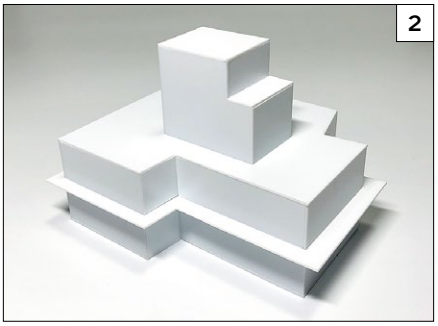
◀左の画像は古写真の原寸大で、色合いも実物をそのまま複写したものである。画面は小さく、焼き付けられた像も、今にも消えそうなほど淡く退色している。前頁に掲載した古写真は、この原本を富士マイクロ社に依頼して、高精細デジタルデータ化し、補正をかけてもらったものである。納められた像が浮き上がって、この天守の特徴が観察できるようになる。古写真の実物は台紙が縦61㎜横102㎜の大きさ

一枚の古写真発見から紡ぎ出された
福知山城、真の姿に挑む

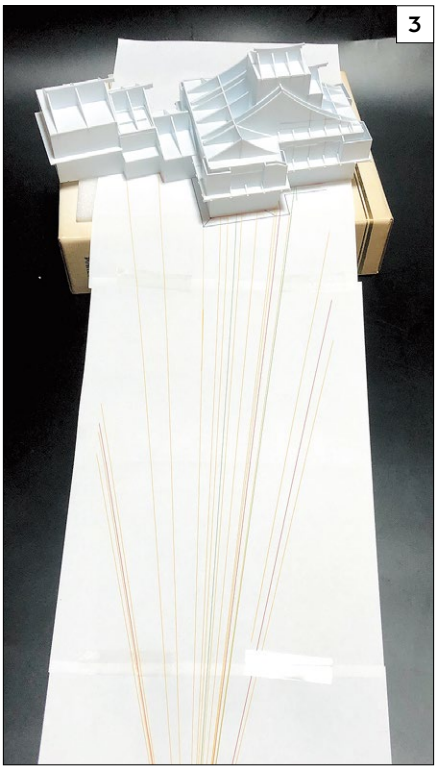
福知山城の製作



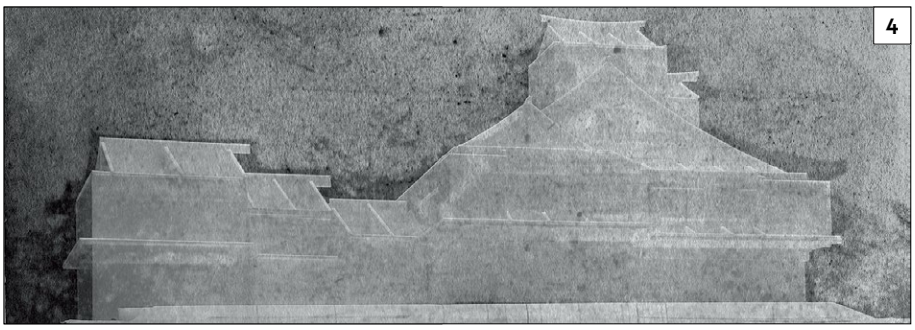
1 古写真の撮影地点を推定し、その一点から放射状に軒先などの位置を平面上に投射して各部の寸法を割り出していく。このとき、撮影地点には誤差があることを考慮し、解析値をもとにあくまで「設計値」を求めることを念頭に置くことが重要



2 平面を推定し箱組を作る。古写真は高さについては基準点が少なく、投射による解析を充分に行なうことができない。目で見た比率などから設計値を推定した

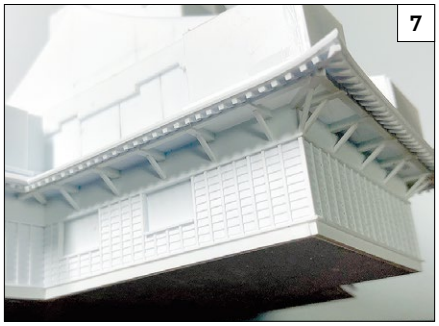


3 古写真からわかる推定撮影地点との距離、高低差を再現し、骨組みを撮影する

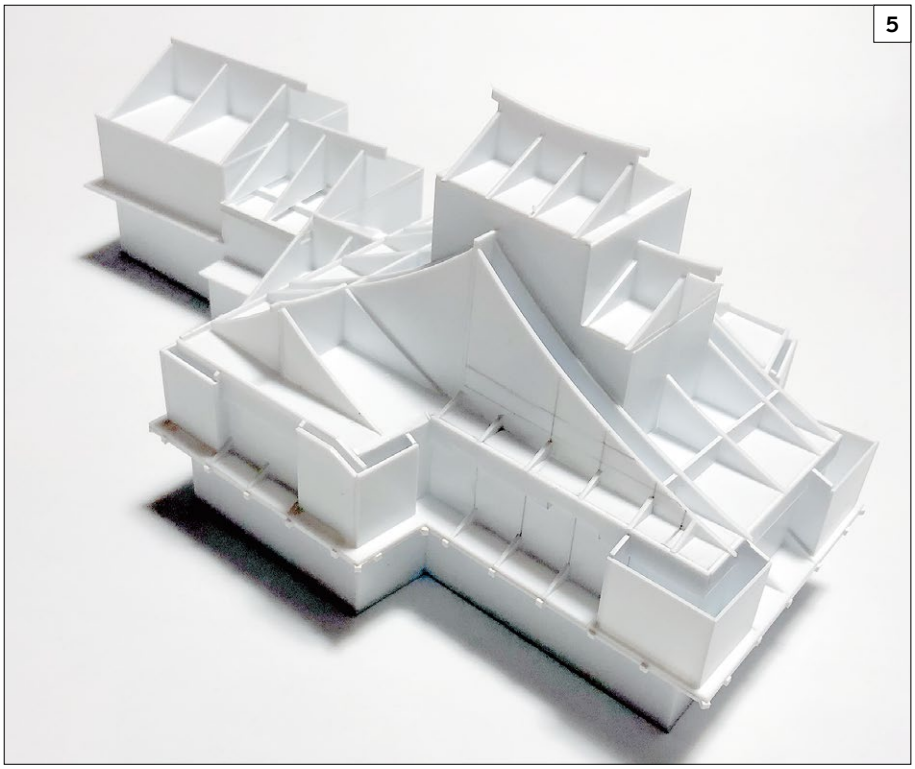


4 3で撮影した骨組みを古写真と重ね合わせて確認、修正を加えていく。この作業の結果、屋根張りまで進んだ段階で当初作成していた骨組みの寸法に誤りがあることが分かり、一から作り直すことになった

6 下見板はエバーグリーンのプラ板とプラ棒。1.5mm幅のラップサイディング板に0.28㎜×0.56㎜のプラ棒で表現



7 壁面と軒下の作成。さまざまな太さのプラ棒を組み合わせて、構造とその形状を造形していく。(写真は当初版＝修正前)



5 完成した骨組み。屋根が複雑な形状を呈しているため、設計して作るというよりもむしろ、現場で納めていく感覚で製作しながら納まりを検討していくことになる

9 丸瓦を貼り終えたところ。特注の軒瓦エッチングパーツを取り付け、丸瓦に見立てた1㎜幅のハーフラウンドプラ棒を一本ずつ貼り付けて本瓦葺の屋根を表現する

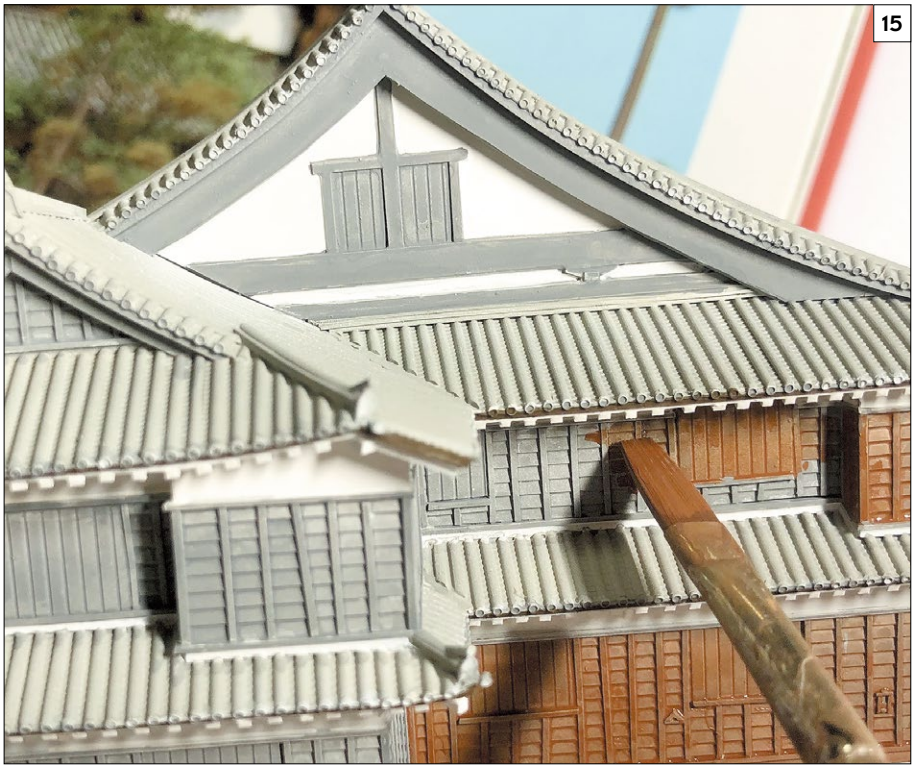
8 屋根面を張り込んだところ。屋根には0.75㎜幅のラップサイディング板を使い、平瓦までを造形している

10 棟や鬼瓦のほか、窓や破風板といった細部を工作して天守の造形完了

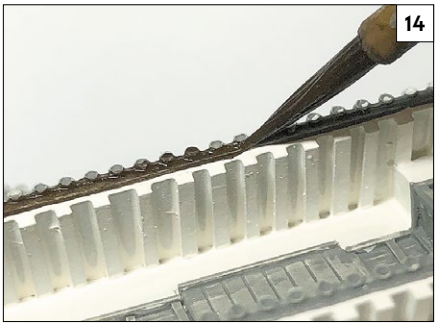
13 下見板など木部にタミヤアクリルのダークシーグレイを筆塗りし、白壁部分だけを残す

11 天守の下塗り。全体にサーフェイサーを吹き付けた後、エアブラシでタミヤアクリル ミディアムグレイを下地色に。白壁部分はデッキタンを吹き付けて下塗り完了

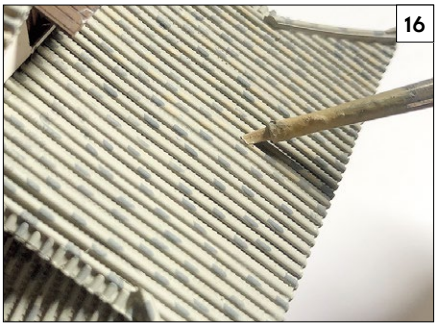
12 タミヤアクリルのフラットホワイトを白壁部分にエアブラシで吹き付ける。乾燥後、アクリルガッシュで調色した漆喰色を筆塗りして白壁とする



15 木部に少しずつ色を入れていく。水で薄めたタミヤアクリルのNATOブラウンを平筆でのせていく。このとき、下地色が透けるようにする。乾燥後さらに濃い色を塗り重ねていく。現実には失われた建物なので、実在する同時代の建築物の写真で色彩のイメージを明確にしながら色を出していくのもひとつの手



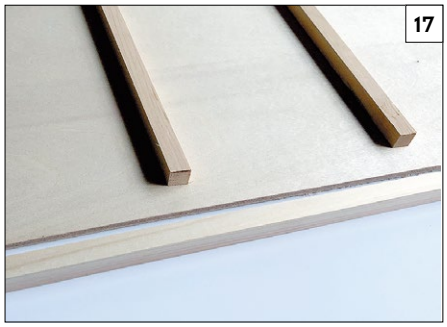
14 軒の線を引き立たせる「裏甲」部分は、面相筆で丁寧に塗分ける



16 瓦は極細の平筆で塗り分け後、薄いエナメルのブラックを上から塗布して瓦色に近づける。明るめのベージュがかったグレーを主体にすると、古びた瓦の色に近づく

19　独特な凹凸のある天守台は石粉粘土で造形。それ以外の石垣は石積みを彫り込んだ1mm厚のスチレンボードを貼りこんだ

18　建築用断熱材(カネライトフォーム)やスチレンボードを積層して曲輪の凹凸を作成。周囲の化粧板は、シナベニヤ板を当てて形状を写し取り切り出す



17　ダイオラマの台枠の作成。シナベニア板にヒノキ角棒の枠と桟を木工用ボンドとビスで組む

22　地面はアクリルガッシュの赤墨で塗りつぶして下地とし、石垣は使い古した面相筆を使って色をのせ、表情をつけていく

20　地面には壁補修用の軽量パテを摺りこみ、硬化後にサンドペーパーをかける

21　スチレンボード製の石垣部分には水で薄めたモデリングペーストを塗り質感を出しておく

25　完成

24　高く伸びた雑草の表現はコースターフで。マットメディウムを定着材に使い、指で押さえて表情をつける

23　松の木などの樹木は枯れ枝を幹として、オランダドライフラワーを瞬間接着剤で取り付け枝にする

9784499233170

1920076038006

ISBN978-4-499-23317-0 C0076 ¥3800E

定価（本体3,800円＋税）